

研究会報告

T6-12

第 34 回 東京医科大学循環器研究会

日 時：平成 12 年 12 月 2 日（土）
午後 2 時 30 分～
場 所：東京医科大学病院
第一研究教育棟 4 階 第 2 講堂
当番世話人：東京医科大学八王子医療センター
循環器内科 永井 義一

1. 術前より重症腎機能障害を有する High Risk 症例にたいする CABG 三例の検討

(外科第2)橋本雅史、市橋弘章、佐々木司、池田克介、平山哲三、石丸新

【目的】近年、CABG 適応症例の High Risk 化は著明である。本年施行した High Risk CABG で、術前 Cr が 3.0 以上と重症腎機能障害の 3 例を検討した。【症例】症例は、62 歳男、70 歳男、79 歳男。全例で糖尿病を合併。術前 Cr は 4.22、3.50、3.84。手術は体外循環下に 2 枝バイパス 2 例、3 枝 1 例であった。術後 2 例に縦隔炎を合併し、大網充填術を必要とした。うち 1 例は、術後 4 ヶ月目に透析導入となった。【考察】Cr. 2.0 以上の CABG mortality は 20~30% で、Cr. 高値は有意な危険因子とされている。この 3 例は救命しえたが透析導入 1 例、縦隔炎合併 2 例と決して満足出来るものではない。体外循環は手術侵襲を大きくし高サイトカイン血症となるとの報告もあり、今後 High Risk 症例に対しては、低侵襲である Off Pump CABG に移行し安全性を高める必要がある。

2. 当院における Doughnut Heart Support を用いた off pump CABG の検討

(田無第一・循環器科)末定弘行、首藤裕、雨宮正、高江久仁、山家実、(外科第2)橋本雅史、伊藤茂樹、(金沢大学・第一外科)高橋政夫、渡辺 剛

当院では平成 8 年 8 月に MIDCAB の第 1 例を行って以来 29 例の off pump CABG 症例を重ねてきた。症例の内訳は MIDCAB が 12 例、OPCAB が 17 例で、うち 12 例に LCX 領域および 4PL(AV)の再建を行っている。吻合に際し PCPS を stand by したが PCPS を駆動した症例はなかった。29 例中 27 例は手術室抜管でき、周術期の最低 Hct は 22%、最低 Alb 値は 2.5g/dl であり、術後の水分管理は容易であった。また PMI、術後 LOS の発生および入院死亡はなかった。極度の心臓の脱転が要求される LCX 領域を含むあらゆる病枝へのバイパスを心拍動下で可能にしたのは Lima suture による術野の展開と、Doughnut Heart Support の優れた stabilize 性能によるものと考えられる。off pump CABG は人工心臓使用による血液希釈、心停止による心機能の落ち込みを回避できるため従来の手術では躊躇された低左心機能例、低肺機能例に対しての適応の拡大が期待される。

3. 冠動脈瘤を伴った冠動脈・肺動脈瘤の外科治療

(八王子・心臓血管外科)前田光徳、小長井直樹、矢野浩巳、三坂昌温、松丸泰介、工藤龍彦

【目的】冠動脈瘤を合併した冠動脈・肺動脈瘤は、本邦では 42 症例の報告しかない。今回、当施設で経験した症例より、治療方針について検討した。【対象】対象は 1988 年から 2000 年 8 月までに当施設で経験した 4 症例であり、平均年齢は 53.7±13.0 歳、すべて男性、主訴は胸痛 3 例、動悸、心雑音 1 例であった。冠動脈瘤径は平均 15.3±3.4mm であり、全例に冠動脈・肺動脈瘤を認め、1 例に #7 に 90% 狭窄、内胸動脈・肺動脈瘤を認めた。【治療方法と結果】手術術式は、冠動脈内瘤孔閉鎖術 1 例、選択的瘤孔結紮術 3 例であり、AC バイパス術を 1 例、瘤摘出術を 3 例に追加した。平均手術時間は 251 分であった。術後経過は全例良好であった。【考察】冠動脈瘤を伴った冠動脈・肺動脈瘤は、たとえ冠動脈病変がなくとも coronary steal 現象や瘤内の血栓形成による塞栓症等による心筋虚血や冠動脈瘤破裂をおこす可能性があり、心事故予防のためできるだけ早期に根治的治療を行うべきと考えた。